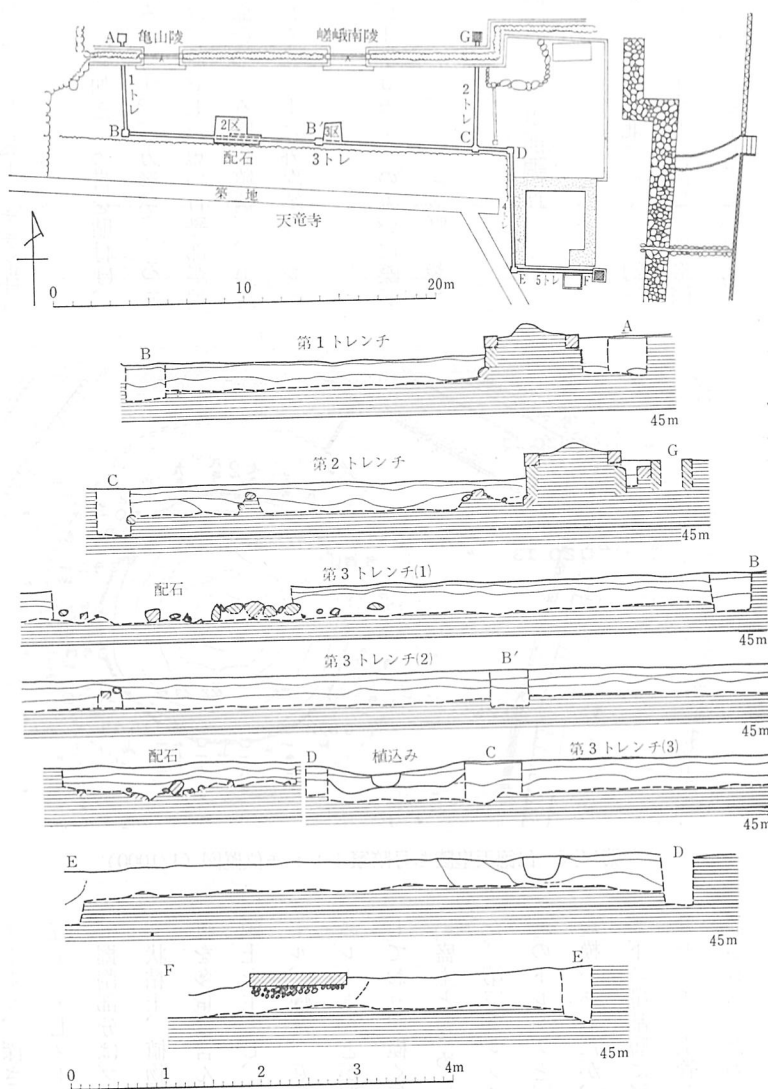


四 後嵯峨天皇陵・亀山天皇陵排水管設置箇所の事前調査

後嵯峨天皇陵南陵と亀山天皇陵とは、天竜寺旧境内地に幕末に相並んで再建された法華堂である。

当該地は、天竜寺等の堂塔の遺跡にあたるおそれもあるので、雨水等を陵域外に排出する管を取設けるのにさきだち、埋設溝の掘方にならって巾25センチ深さ30センチほどのトレンチを第15図のとおり設定して昭和五十一年三月二十三日から六日間をかけて調査した。

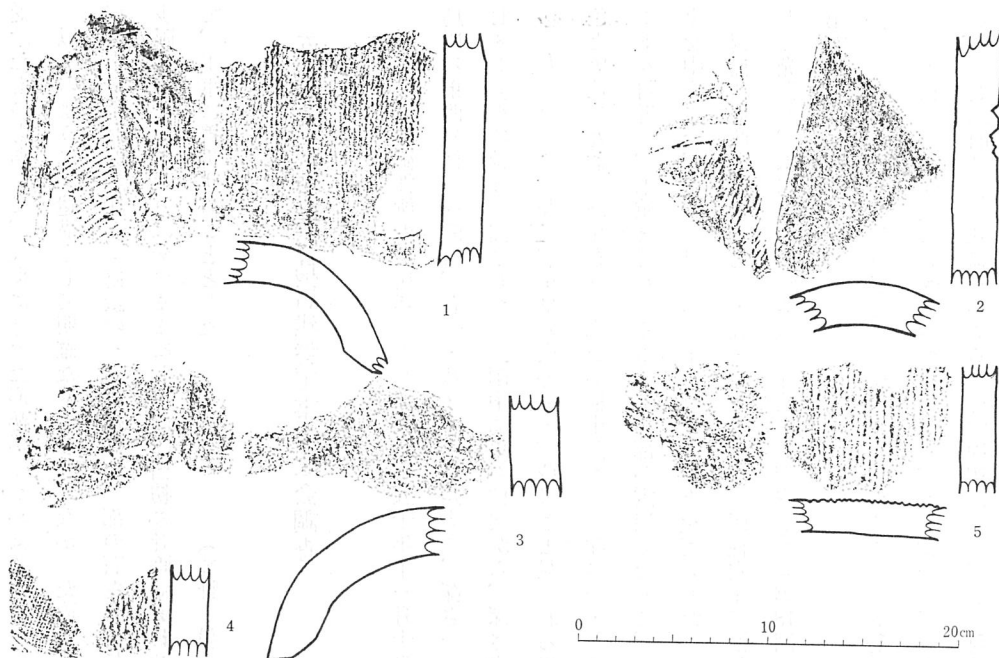
標準的な層序は、上から白砂混り土層・固い黒褐色土層・柔い黒褐色土層と一応3層に分けられるが、狭く浅い範囲での所見でもあり、必しも判然としたものではない。とくに第4および5トレンチにおいては、層序としての把握は難しく、攪乱を受けているようにも見える。埴込みの部分の落込みのほか、第2トレンチ西寄りの部分から、大は径35セ



第15図 嵯峨南陵トレンチ位置 (1/400) 及び断面 (1/80)

ンチ、小は10センチほどの角礫と円礫からなる礫群、東寄りの部分から重ねあわせた瓦が検出された。

前者は、第17図に示すように、北に面をそろえた礫を組みあわせて二、三段に積んだ人為的な石組みを思わせる部分もあるが、全体として雑



第16図 嵯峨南陵の出土品 (1/4)



第17図 (左) 嵯峨南陵礫群出土状況
(右) 同詳細 (石垣状)

然とした礫群である。崩壊した石垣のように見えるが断定できない。後者もその性格は不明である。

出土した遺物は、主として瓦片とカワラケの細片で、どの層からも検出される。ほかに磚片・炆器片・陶器片がごく少量ある。全形の知られるものはない。

瓦は、表裏とも平滑なものが多いが、中に第16図に掲げるような布目や縄目のあるものや、巴瓦がある。火を

受けたものもあって、火災にあった形跡がうかがえる。

以上のように、遺構として明確なものを認めなかったため、京都市文化財保護課とも協議のうえ、礫群の一部の石を必要最少限度はずして残りはそのままにし、ほぼ当初の計画にあわせて、工事に着手することとした。

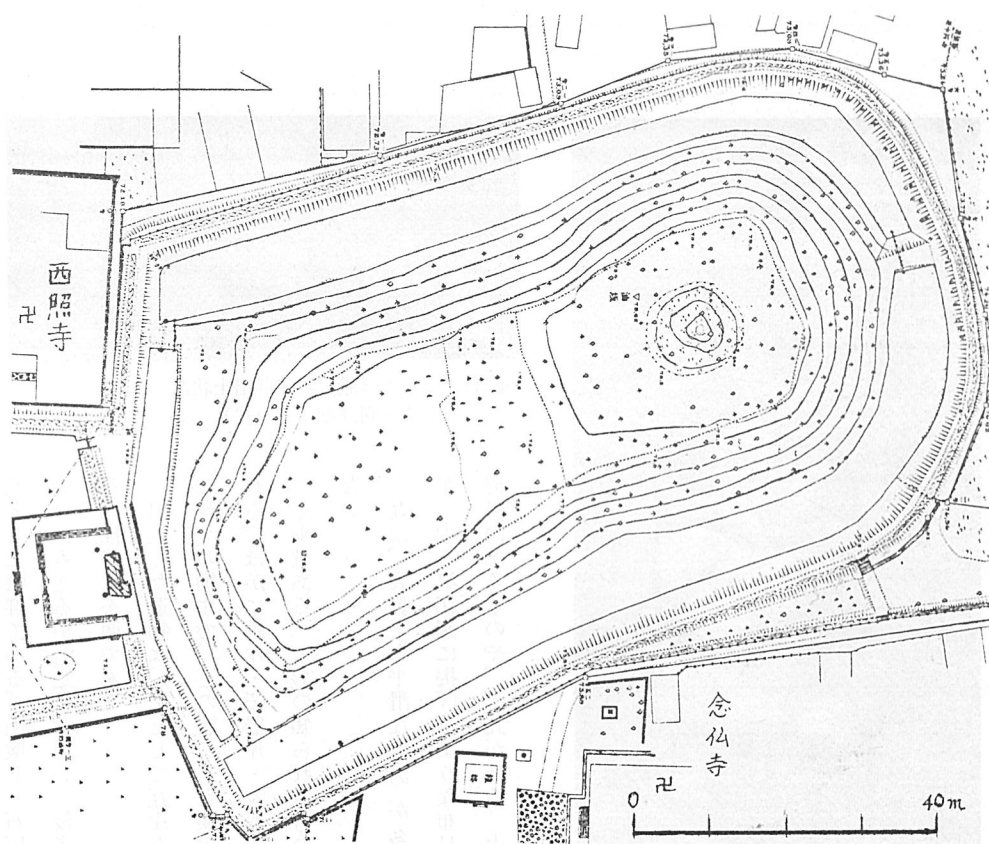
(笠野 毅)

五 開化天皇陵の鳥居建替工事の立会調査

開化天皇陵御拝所の鳥居建替のため、昭和五十年十一月十日鳥居の東西の柱の周囲を、各一・八メートル四方で、深さ一・七メートルの設計で掘削した。掘削中に東の柱穴から、深さ六〇～九〇センチの間で、少量の火葬骨と、蔵骨器と見られる黒色と灰色の瓦器の破片を立会職員が検出した。又深さ一・二メートル附近で、木棺と思われる木箱の一部が露出したので、工事を中止させ、翌十一日から二十一日まで調査を実施した。

調査は東柱穴を東へ約一・五メートル、西へ西柱穴まで拡張して発掘し、木棺及び蔵骨器の存在状況を調査した(第18図・第20図)。

柱穴の部分は、文久の修陵以来数回の鳥居建替により攪乱された土相で、粘性土に砂礫陶磁片等を交え、地下約一・三メートルの処に旧鳥居の基礎石がある。柱穴周辺部の状況から見る



第18図 開化天皇陵鳥居建替工事発掘位置図 (1/1000)